

正岡子規著「墨汁一滴」岩波文庫、岩波書店 1927年12月15日刊を読む

墨汁一滴

1. 今日(けふ)は朝(あ)よりの春(はる)雨(あめ)やや寒(ひや)さを覚(おぼ)えて蒲(よもぎ)団(だん)引(ひ)被(か)り臥(ふ)し居(ゐ)り。垣(かき)根(ね)の山(やま)吹(ふ)やうやうに綻(ほころ)び、盆(ぼん)栽(ざい)の桃(もも)の花(はな)は西(せい)洋(やう)葵(あおい)と並(なら)びて高(たか)き台(だい)の上(の上)に置(お)かれたるなどガ(ガ)ラ(ラ)ス越(こ)に見(み)ゆ。午(ひる)後(ご)は体(てい)もぬくもり殊(こと)に今日(けふ)は痛(いた)みもうす(す)らぎたれば静(しず)かに俳(はい)句(く)の選(せん)抜(はく)など余(あま)念(ねん)なき折(せ)から、本(ほん)所(じよ)の茶(ちや)博(はく)士(し)より一(いっ)封(ふう)の郵(ゆう)書(しよ)来(き)りぬ。披(ひら)き見(み)れば他(た)の詞(ことば)はな(な)くて

ぼくじゆういつてきにぎす
擬(ぎ)墨(ぼく)汁(じゆう)一(いっ)滴(てき)

左(ひだり)

総(すべ)じて物(もの)にはた(た)らきなきは面(めん)白(はく)からず。されどもはた(た)らき目(め)だちて表(あらわ)に露(つゆ)れたるはかへつていやしき処(ところ)あり。内(うち)にはた(た)らきありて表(あらわ)ははた(た)らきなきやうなるが殊(こと)にめでたきなり。

どうにゆうらく
道(どう)入(にゆう)の楽(らく)の茶(ちや)碗(わん)や落(らく)椿(ちん)

春(はる)雨(あめ)のつれづれなるま(ま)の戯(たわぶれ)にこそ、と書(か)きたり。時(とき)に取り(と)りていとを(を)かし。

(4月18日)

2. をかしければ笑(わら)ふ。悲(かな)しければ泣(な)く。しかし痛(いた)みの烈(こ)しい時(とき)には仕(し)様(やう)がないから、うめ(うめ)くか、叫(こ)ぶか、泣(な)くか、または黙(もく)つてこ(こ)らへて居(ゐ)るかする。その中(なか)で黙(もく)つてこ(こ)らへて居(ゐ)るのが一番(いちばん)苦(くる)しい。盛(も)んにうめ(うめ)き、盛(も)んに叫(こ)び、盛(も)んに泣(な)くと少(すこ)しく痛(いた)みが減(へ)ずる。

(4月19日)

[コメント]

正岡子規が死(し)を迎(むか)える1年(いちねん)前(まへ)に書(か)いたこの随(ずい)筆(ひつ)も、素(す)直(ちよく)な心(こころ)で日(にっ)常(じょう)の生(せい)活(くわく)を描(え)き、読(よ)む人(ひと)の心(こころ)を打(う)つ。

- 2012年5月10日林 明夫記 -